

森林工芸館の

あれこれ

no.44

11
2023

森林工芸館のあれこれno.44では
オケクラフトの育ての親である
「時松辰夫」さんについて
秋岡さんとの関係や
なぜ置戸でろくろの指導をすることになったのか
その経緯などについて
時松さんの背景にあるコトとあわせて
ご紹介していきます
置戸やオケクラフトとの関わりが
どのような背景の中で起きたことなのか
秋岡さんと父である梧郎さんについて紹介した
あれこれno.43とあわせてぜひご覧ください

時松辰夫さん
と置戸と…

人と、木と、おけと



講師 時松辰夫さんと歩んだオケクラフト～誕生までの動き～

1983年2月、秋岡芳夫さんを講師に行われた置戸町民憲章推進大会の講演後、秋岡さんを囲んで行われた懇談会の席で、置戸町の森林資源を有効に活用する方法として、木工ろくろの導入を提案されました。秋岡さんはこの時すぐに、技術講師として「時松辰夫」さんが置戸に出向くように東北工大と連携を取られていましたが、置戸町では具体的な対応には進んでおらず、時松さんから置戸町へと連絡が入りました。この連絡以降、具体化していくために、活動の拠点となった開発センターは多忙を極めます。

同年5月、時松さんは初めて置戸町を訪れ、4日間の木工ろくろ講座が開発センターで開催されました。当時、十分な施設設備とは言えない中で開催された講座は盛況の内に終了し、この講座を契機に以後、毎月1回の時松さんによる木工ろくろ指導が始まります。この継続指導に向け、公民館で行われていた「木に親しむ日」の常連と職員、そして時松さんが一体となり、機械や道具、原材料の確保などの環境整備が進められていきました。

8月には、時松さんが「基本資源を見直し、置戸でどんな生活をしていくことが望ましいのか」を具体的に考え、手足を動かしていく実践組織として「森林文化研究会」が発足します。この森林文化研究会が中心となり製作されたクラフトは、秋岡さんによって「オケクラフト」と名付けられ、11月には東京日本橋高島屋にて、「白い器展」が秋岡さんが主催するグループモノ・モノの協力により開催され、多くの方にお披露目されました。

時松さんと秋岡さん

1937年大分県生まれの時松さんは、職業補導所（現職業訓練校）の木工科を経て、現大川市の和箆笥工房に4年間弟子入りした後、大分県日田産業工芸試験所に研究生として入所します。当時、縁あって秋岡さんが展開していた「モノ・モノ運動」に初期のころから賛同し、グループモノ・モノが企画する展示会等に「山村クラフト」を出品され続けていました。



少年時代から愛読していた雑誌「工芸ニュース」を通して東北への憧れを抱いていた時松さんは、東北で学びたいとの思いを捨てきれず、1980年43歳で工芸試験所を退官すると、当時秋岡さんが指導をしていた東北工業大学工業意匠学科（現産業デザイン科）・第三生産技術研究室に研究員として参加します。その後、秋岡さんの後押しを受け、岩手県大野村（現洋野町）、北海道置戸町をはじめとする全国30か所以上で、木工ろくろを活用した地域材の活用方法やデザインなど、木工を通してまちづくりに関わってきました。

「木は平等。」

「器にならぬ樹はない。」

「どんな木も生かす。」

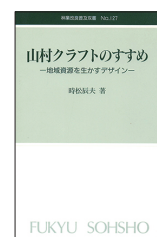
をモットーに、熱心な指導を生涯続けられました。

時松さんがモノづくりと置戸に込めた思い

■同じ椀でも背景が違えば全く違うものである

田舎の人は「田舎は何もありません」というけれど、（中略）田舎ほど、都市には求められない可能性をもっている。それだから、地域振興もそれぞれに個性のある取り組みが面白い。（中略）山村クラフトの素材はそれぞれの地域で、みんなちがいます。物語がちがいで、したがって開発手法がちがいます。（中略）地域は違う特色をもつという認識と同じ形でも生み出される背景や取り組み方がちがうので同じものはできません。（中略）形が特色なのではなく、その地の風土とそれを愛する人々の生活のありようと、そこから生まれる上質の生活用具には必ず特色がでるものです。そのことを基本に美と楽しさを追い求めるものづくりの姿勢がクラフトマンシップです。（「山村クラフトのすすめ」一部抜粋）

時松辰夫さん関連図書（どま所蔵）

山村クラフトのすすめ
地域資源を生かすデザインどんな木も生かす
山村クラフト